特 249
712

# 武道と禪

總持寺後堂兼
澤大學教授
澤木興道老師講演

水戸高等學校大徹會

始

特249
712

# はしがき

武道家は直ぐ武道は精神修養になると云ひます。然らば武道の如何なる点が如何なる意味で修養になるのでせう。武道の修練と共に人格も練り磨かれる人があるかと思ふと、武藝に於ては天下の達人と云はれ乍ら、肝腎の人格の点では驚く可き迷人もある。これは何故でせうか、これは一に肝腎要の点をよく承知してゐるか否かによるもので、毫釐も差あれば天地懸隔するのです。即ち之は處する態度、心構への如何によつて、同じ武道の修練が要に的中して人格の練磨となつたり、要を外れて人格とは無關係ともなる譯です。

近來武道は甚だ隆盛になつて居ますが、果して眞の武道精神が之に伴つて居るか否か。武道が外來のスポーツと同じ意味で玩弄されるのならば、固よりお話になりませんが、だからと云つて所謂實用を主として單に斬る技術、防ぐ技術丈けを學ぶのであるならば、此の科學文明の現代では時代錯誤と稱すべく、寧ろ防彈チョッキや毒ガスの研究とか、射擊や突貫の練習をした方が賢明です、にも關らず、武道が奬勵されるのは何故か。それは實に斬る防ぐ技の末ではなくして、實に其の間に体得される武道精神にあるのです。

# 武道と禪

只今から「武道と禪」といふことについて、平素から考へてゐる一端をお話したいと思ひます。皆さんはどう考へてゐるか知らないが、禪をやる坐禪をやると何ふと、何かかう消極的な生まぬるい力抜けのしたことのやうに考へる人があります。

ところが武道をやるといへば、活氣横溢です。勇ましく敵を前にして渡り合ふので、見てる方が手に汗を握るといつた工合である。

禪と武道とは、さういふ譯で一寸見た眼には、全く趣きの異つたものの様に考へられるが然し實際をいふと、そんなものではない。禪は決して消極的な生まぬるいものではない。私は禪坊主で武道は少しもやつたことはないが、武道の仕合を見てゐると「うん、なるほど！」とうなづかされるところが多いのです。坐禪の中に私どもが感得する潑剌たるものが、武道の仕合にぐん〳〵出て來る。腕の冴えた、いや境界の練れた人同志の仕合と來たら、そりやたまりませんぜ。



武道精神とは何か。人格の修練とは何か。劍禪一致の妙諦如何。其の妙諦を、玆に現代の澤庵和尚であり坐禪の總本山である所の澤木和尚に拜聽致し度いと思ふのです。

本書は嘗て警視廳に於て、關係の武道家、及び總監以下幹部に對して爲された講演の筆記で、後當「禪の生活」誌上に載つたものを、聞き違ひと思はれる個所を私が書き改めたものです。和尚の御講演はお聞きの方は御承知の通りで、トーキーにでも撮らなければ、言葉の筆記位ではほんの內容の一部しか傳へる事は出來ませんが、而も夫れ丈けでも之れは無限の內容を包藏せる大獅子吼、大文字であると信じます。玆に和尚にお許しを乞うて版に付し、世の武道家、求道の諸有志に贈る所以です。

昭和十一年十一月廿三日

水戸・大徹堂に於て

石中廣次

私も武道について多少は調べて見ました。いや武道を禪で判じたのです。お面や小手をつけて打ち合うたのぢやない。尤も日露戰爭に出征したので、彈丸の雨の下はくゞりました。銃劍の突き合なら大にやりました。

そんなことはともかく、武道の先生から相談を受けたのが本で、武道の書きものも色々見ました。

○

もう二十年にもなるでせう。私が熊本にゐた時、雲弘流の八十近い老先生がやつて來て「一ちようこの書きものを見て下さい。これは入門の時から貰ふとりまが、どんな意味が云ふてあるのか誰に見せてもさつぱり分りません。どうも禪の文句の様だから澤木和尚に聞けば分るかも知れんちゆうので參りましだ。」と云つて、雲弘流の目錄の隨順抄と云ふのを見せました。見ると仲々面白い、全く禪ですナ。

そこで私が大体を一通り説明した所が「なーるる程、初めて分りました。今まではこんな深い道理は知らずに只やつて居ましたが、これはえゝ。折角のことこれを一ちよう皆が寄り合うた所で話して下はりまッせんか」「よろしい」と云ふことになつて、それでは雲弘流の人達が一月の初



會に集る時に話して貰ひたいといふことになつた。その頃は自動車もなし、仰へに來た人力車に乘つて行くと、そこへ四五十人集つて居た。全部その人達は武道家で、白髯の生えた人やら皺くちやの爺さんやら大層古風な人の集りだつたのに驚いた。井上平太とかいつて、えらいゴッイ人がゐて「私は細川さんの葬式には東京まで歩いて行きましたタイ」といふやうな話をしてゐた。先づかういふ人達が集つて、雲弘流の目錄の研究をやらうといふのです。

「雲弘流には相打ちといふことがある」といつて、先づその見物をさせられた。

素面素籠手で袋竹刀を持ち、互に三足半ッッッと歩み寄つて、同時に相手をボカンとやる。互に痛い目をするのです。

それから愈々研究になつて、一人が私に訊いた「雲弘流では『負ける事なし、勝つ事なし』といふ、これはどう云ふ事ですか。」此の人は十五、六からこの流に入門して今八十幾つです。その永い間當流を稽古して來たその老人が、此の優しい和尚を引つ捕へて訊くのですからね。そこで私は「貴方方の疑のある所を皆云つて下さい。」と云つて、それを書き取つた。「負ける事なし勝つ事なし」「雲弘流には一盃といふ事を申す、一盃とは如何」いろ〳〵出ます。「跡先のいらぬ所を思ふなよ、たゝ中程の自由自在を」これは如何。

それから中位相傳に「一息圓相無我」かういふものを傳へて居りますが、どぎやん事で御座るますか。など七、八ヶ條も質問が出た。それではボッ〳〵やりませう、と云つて私は講話を二時間餘りやつた。其の時に、一番指南預りで岡崎忠雄といふ老人が居まして「數十年此の方、分らずに氣がゝりだつたがこれでスウッとなりました」といふて喜びました。

それ以來武道の目錄は澤木和尙に聞け、と斯う云ふ事に熊本ではなつた譯です。それ以來今日まで、武道の講習會には必ず私が顏を出す、一寸ママア熊本では澤庵和尙ですかナ。熊本では毎年八月になると、武德會の先生等が地方に行つて武道の講習會を開きますが、私は汚い風をして、何時も笠を冠つて、先生等を隨へて歩いてゐる。それに私は眞先に極意を話して、獨りさつさと宿に歸つて來る。先生等は稽古を終へて歸つて來ると、先づ汚い風をした私に挨拶するものですから、田舍の宿屋の女中が疑ふ。「貴方はどういふ人かいた。」「俺か、俺は武道の大將ぢや」とやる。マアさういふ所から緣組が出來て、それが延びて肥前の國にも行きます。

私は三重縣の者ですが、三重縣で師範と弘學館に三十年柔道の先生をして居つた小坂といふ老人がありました。この小坂老人が何卒して、禪宗の坊さんと武道の事を話して見たいといふので行つた事があります。



それから今日では熊本の濟々黌を中心に、それから久留米の九州醫專の柔道部、それから水戸高校の劍道部、之は今の劍道部長が熊本の五高出だから、私が五高に多年行く關係から、それで行きます。

然うした樣な關係で、私と此の武道家、學校、警察關係の武道家と深い因緣が結ばれてゐる譯で、そこで武道の話を私が時々するのです。いや武道は私は知らないので、勝手な話をしてゐるんぢやが、武道家諸君に何やら爲めになるといふことで、話させられるのです。

それで武道家に質問されたり、講話をしろといはれたときに、何うするかといふに、私は禪で話をする。さうすると武道家は武道の話として聞いてゐる、それで丁度いゝのですナ。澤庵和尙にしたつて、武道の達人ぢやない、澤庵和尙は禪で話をしたでせう。それを武道家は武道の話として聞き取つてゐる、それで丁度工合がよく行くのです。

○

武道の中にも色々あるが、居合術の奧傳に「勝利は鞘の中」抜いたら負けといふ風な事がある私は非常に嬉しく思つた。「勝利は鞘の中」さうだ、鞘から抜いたらもう負けで治まりのつかぬものだ、「勝利は鞘の中」です。

四方天但馬守が鐵棒を振上げて「ヤツ」とやつたら、太閤秀吉がグツと睨んだ。眼から五光が射して但馬守はガタ〳〵參つて了つたと云ふ。太閤秀吉がうんとやつた、その眼から五光が出た之が即ち極意です。五光が射さねば駄目です。そこで武道は敵を前に置いて自己を創造するものである、と私は云ふのです。之は武道許りではない。自己に創造力のない者は死人です。土左衛門です。敵を前に置いて自己を創造する。本當の自己を發明する。然らばどう云ふ自己を發明するか。

宮本武藏は「獨行道」の二十一ヶ條――普通十九ヶ條といつて居ります。獨行道は熊本に傳つて居るのです。これは其儘寫したのですから、二十一ヶ條の方が本物です――その中には「我事において後悔をせず」かういふ箇條があります。大抵の者は自分の事を後悔してゐる。他人が何をしたからとて、ちつとも後悔せん、自分のことだと後悔する。自分が彼處の所であゝすればよかつたが、あゝしたものだから自分が負けて了つた。と後悔する。お面と來た、しまつたらしまつたでいゝぢやないか。こつちが負ければ向ふが勝つてゐるんぢや、後悔することはない。自分が負ければ、先方が勝つ、神樣から見れば同じことだ。此方が負けたら先方が喜ぶ、向ふが負けたら此方が喜ぶ。どつちかで喜んでゐる、神樣から見たら過不足はない。



武道は勝負にあるのではない。最高至上の人格内容を、銘々の上に蘇らす道である。かう云ふ意味合で私は武道を御奬めする譯です。所で往々、武道家も自己に欺される。どうでも、かうでも勝たねばならぬといふ事にばかり捉はれるならば、それは武道ではない。

劍術にせよ、柔術にせよ、昔は實用向きであつたかも知れん。生命を保證するためのものだつたかも知れんが、今日は人格を向上さすためのものです。實用にした時代でも「飛び道具は卑怯である、名を名乘れ」といふ工合にして勝負をして、決して卑怯なことをしてゐない。

武道は人格向上のためのものです。武道は人格を涵養して、日本人を拵へるものである。人格を養ふ道も色々あるが、本當の人格を作るのが武道である。自己本來の面目を打ち出して來るのが武道である。柔道の扱心流目錄に「靜意の卷」といふのがある。それに書いてあります「武道は柔道にせよ、劍道にせよ、心を取扱ふものだ、誰の心を取扱ふかと云へば、自分の心を取扱ふのだ。どう取扱ふかといつたら、眞理に到達するまで、宇宙の眞理と波長が合ふまで取り扱へ」と云ふ意味の事がある。眞理は本の中にあるものだと思つてゐる連中があつて、本許り見て青瓢箪になつて居ります。本當の眞理は本の中などにはありません。眞理はその動き方に、その生活態度にあるのです。

柔術をやる者は柔術をやる、劍術をやる者は劍術をやる、眞劍になつて、有るッたけの力を出して、以てそこに自己を發明するんです。自己も自己、本當の自己を發明するんです。

宮本武藏の五輪の書に「空の卷」といふのがある。その中に「其身〳〵の心の贔負、其眼〳〵の歪に依りて」とあるが、之は迷といふ事です。其身〳〵の心の贔負、其眼〳〵の歪みによりて皆見方が違ふといふのです。水の中に落ちたら死ぬ人間もあるし、水の中へ入つたら助かる魚もある。それ程歪みといふものは違ふんです。本當の戰をして敵の陣地を占領して、さうして自分の攻擊した方を眺めなほして見ると「何だ、あんな何でもない所だつたのか」あれ位の所がまあ敵を攻擊してゐる時分には鬼界ヶ島の樣に見える。歪みがあるのです。

先日も理學博士で柔道家で、二十年許りも坐禪してゐる人が來て、學生時代の柔道の試合の話をしました。試合の時には、向ふの見物人が幕を張つたやうに見える。一分間か二分間が三年位してゐる樣な氣持がして息の切れる樣な試合をしてゐる。其間無茶苦茶にやつてゐる。それで先方もさうであるから、勝つたり負けたり、紛れ當りで何の事はないと云ふ。

私は十三の時に、俠客が七十人許り斬り合ふのを見ました。斬り合ふのが皆眼を塞いで無茶苦茶に刀を振り廻してゐる。あんな者殺すのは譯はありません。



私は日露戰爭の時に、敵前上陸をしました。第二軍です。上陸の掩護からやりました。非常にまあ愉快な一番先の上陸です。私は一番先上陸したもので、素裸になつて草鞋を穿いて、背嚢等皆頭の上に載せて、陸戰隊と一緒に上陸しました。つゞいて南山で戰爭をやりました。一番初めが鐵道破壞です。あの時にクロパトキンに逃げられたのですが、此の戰爭の時機關銃といふもので薙ぎ倒される兵隊を初めて見ました。薙ぎ倒されたのは第二軍では我々が初めの方ですが、其時の我々は本當の魂ではない。衝動的に動くだけであつて、何が何やら譯の分らぬ事をやつて居りました。皆何處に指揮官が居つてどうして居るのやらそれが分らない。そこで「ウン」と丹田に氣力を充實して思ひ切つて私は立ち上つた。それからウンと向ふを眺めてやつた。そこで私が日本の全國を背負つて、自分一人で立つた樣な氣持になつた。俺がやらないで誰がやるかといふのです。そこで中隊長の所に行つて、議論をした。中隊長が「澤木、危い！」と云ふ。危いでは戰爭は出來ない。私は、皆號令もないのに盲滅法に打つて居るが、敵は何百米の所に居るのか、こんな事でどうするのか、と喰つてかゝつたら「皆止めさせい〳〵」と云ふ。そこで私は全軍は自分が指揮せんとならん樣な氣持になつた。さうすると、兵隊の照尺點、着彈點の間違ふ所がスッカリ見える樣になつた。恐る〳〵眼をつぶつて居る間は眼が見えないが、何糞と思つて立つた時

に一切見える様になつた。よし之ならば戰爭が出來る。私は一中隊全部の兵の尻を銃で突ついて廻つて打つのを止めさせた。すると兵は急に我に歸つて全軍大いに奮つた。

私は戰爭といふものを初めてやつた譯であるが、重砲や臼砲や山砲や野砲や、海軍のこんな彈丸まで飛んで來るから、えらい音がする。そこで私は本當に嬉しかつた。やれると思つた。其れからは何時の戰爭でも平素の演習よりはもつと嚴格に、自分の部下丈けは指揮して戰爭をしました。

凡そ如何なる場合でも、心に最負、眼に歪があつてはならぬ。自己の最負自己の歪に欺されてはならぬ。

○

負けても自己を見失はず、勝つても自己を見失はぬといふ、其處に力一杯ある限りの力を出す私は人間が力を出すといふ事が非常に好きです。力を出し惜しみして居るのを見ると張り倒したい樣な氣持ちがする。東京のバスガールでも運轉手でも田舍のに較べて、非常に氣持ちよく見えますが、力一杯やつてゐて人格に隙がないからいゝのです。我々の人格を隙間のない人格に育てどうでもかうでも力一杯の人間になるといふことが人間として一番大事です。何處かに隙がある



と、股倉にでも、腹にでも隙がある、デレッとしてはいかぬ。

斯ういふ話が熊本にあります。仲仕と柔道家と喧嘩をしたといふのです。仲仕と喧嘩するのだから人格の高からざる柔道家ですがね。柔道家は術を知つてゐるものだから、咽喉を絞めた。仲仕も中々柔道家に突掛つて行く位な奴だから、腕に覺えのある奴だ。角力の一番位取る奴なんだ柔道家は仲仕の咽喉の方許りグン〳〵やつて居る。仲仕は咽喉を絞められてバた〳〵やつてはるたが、手は絞められてゐない、自由です。この手は相手の隙間のある所を何處でも狙つて、ギュッとやれるのです。遂に其の手が柔道家ののし掛つて居る、その股倉に行つた。股倉にぶら下つてゐるダン袋を探り當てゝギュッと掴んだ、ダン袋と咽喉の激戰になつた。遂に柔道家が參つてしまつた。柔道家は隙間を狙はれて參つたのです。

隙間といふ事から考へると、我々も坐禪をしてゐるときに、隙間を作つてゐる事があるが、最もよくないことである。人間は力一杯を、自分の職務に出して居なければならぬ。隙間を作つて居ては駄目だ、隙間なく一生懸命でやつてゐる。それが成佛といふ事です。

○

よく昔話にあることだが、或る武藝者が谷川を渡らうとした。深い谷、一本橋の丸木橋、とて

も凄い所です。容易に渡れず先づ一ぷくと煙管を銜へて休んでゐると、盲人が來た。こんな危な橋をどうするかと見てゐると、チョッ〳〵〳〵と平氣で渡つて行つた。

無眼流といふ劍道は盲人の橋渡りを見て發明したものだといふ。

盲人の橋渡りを見て何を發明したのか。一体我々は自分の眼や耳に欺されてゐる事が澤山ある自分の持つた眼や耳に欺されずに、眼や耳の働きを思ひ切り發揮すれば、劍術をやつても滅多に負ける氣遣ひは無いのです。

中里介山の何かにも書いてあるさうだが、彼のドレレンレンの祭文語りが武者修行に化けて、或る道場へ試合に行つた。非常に日燒けした大男が刀の鞘の禿けちやくれた、ドえらい奴を差して「頼まう」と行つたといふのだ。既に日は暮れかけて居る。道場主は一風呂浴びて今晩酌でもやらうと思つてゐたところである。「もう日も西山に傾いてゐる、お弟子達とお手合せは御免被る、先生と直接一太刀御稽古を願ひたい」といふ。えらい奴が來たものだ。先生も仕方がない、道場に出た。先生は少し變だとは思つたが、イザッといつて立ち上つた、立ち上つて先生は驚いた、これは何といふ隙だらけだ。隙だらけも道理だ、劍術も何も生れて一度もやつた事のない祭文語りだ。祭文語りぢやない、賣卜者だといふ說もある。どつちにしても劍術は素人だ、竹刀一



つ持つた事のない奴、木賃宿に行くには、今日は不景氣で錢が足らぬ、劍術道場に行つて先生に突ッかゝれば、うまく行けば晩飯にありつけるぞといふ、太い奴だ、どやされるのは覺悟で來てゐる。さあさう度胸を据えて來ると、体中の隙はありながら、馬鹿に出來ぬ所が見える。諸國を渡り歩く武者修行、これ程に開ッ放しに隙をさらけ出すといふは、たゞ事であるまいと、先生考へた。どういふ劍か、深い戰略があるのかも知れん。さういふ風に頭が働き出したら、疑心暗鬼を生ず、祭文語りの馬鹿氣た構が、種々の名手に見えて、先生恐しくなつた。やゝ立ち合つて居る中に、生汗をかき出した。打ち込まうとは思ふが、此方がかう行けば、彼方はあゝ來るだらう此方がかう出れば、彼方があゝ行くだらう。先生は自分の智慧に欺かれて終つたのだから、どうにも仕方がない。竹刀をガラリと投げ出して「恐れ入つた御腕前、先生は一体何流の達人で御座るか。」と云つたといふ。先生に頭を下げさせて了へば祭文語りも安心だ、しかし此の男は根が正直者で「いや私は實は祭文語りで、あぶれて飯を一ぱい頂戴に上つた次第で」とあつさり名乘つて了つたといふ笑ひ話があるが、自分で自分に欺されるとこんなへまを見るのです。

「迷」といふのは、つまり自分に欺されたものゝ妄である。自分に欺されねばいゝ。禪では之を「心の主となれ、心を主とする勿れ」といふ。お互はいつも自分に欺され通しだ。自分の足音

を聞いて、おや誰れか追つかけて來るぞと思ふ。墓場を通つてゐた男が、自分の足音に驚いて氣絶したといふ話がある。褌の乾してあるのを見て「ギャッ」と云うて氣の遠くなつた女がゐる。幽靈だと思つたのである。此頃は街燈が出來たから大分幽靈が減つた樣だが、昔は幽靈が多かつた。自分が自分に欺されないやうにすることが肝腎です。劍術でも柔道でも弓でも鐵砲でも、凡て武道の要諦といふものは、自分の智慧に自分が欺かれないやうになる事だと思ふ。最も深刻な張りつめた、自己の波長と宇宙の波長とが、ぴつたり合つて、天地と隙間のない人間になりきつた所が武道の極地であらねばならぬと私は信じて居ります。つまり三昧です。三昧になつたのが武道の極致です。

○

私は熊本で斯う云ふ話を聞きました。井上平太と云ふお爺さんが「昔の衆はひどい試合をし居りなはりました」と云ふ話を能う仕居つた。それはどう云ふ話かといふと、雲弘流の武道家、川並權太夫先生が某と試合をしたときの話です。二人は同じ流儀なんです。此の二人が兩方から物の見事に、相打ちも相打ち、ィヤッといふ程頭の打ち合ひをやつて、其の儘うーんと氣絶して了つたといふのです。兩方とも精限り、根限り、力限り、思ひ切り、そこへ投げ出して、ウーンと



氣絶して了つたのです。他の人が驚いて水を吹つかけたり、氣付け藥を飲ましたり、活を入れたりして、漸う〳〵のこと二、三十分許りして生き返つた。そして二人は顏見合せ「御無禮でありました」というて挨拶したといふ。まあ實に痛快な事ぢやないですかナ。こゝです。

私達の坐禪でも、坐禪をするのには、群がる敵中に只一人で躍り込んで戰つてゐる眞劍さがなければ、坐禪も何にもならぬ。ボッと虱の喰ひついた事が堪らぬ樣な顏をして口を開き、眼をつむつて眠つてゐる樣な事では何にもならぬ。この精限り、根限り、何にでも、どの仕事にでも力一杯出せばいゝのです。其力一杯出す練習は敵が前に居つて果れぬと仲々出ぬ。自分一人でやればよささうに思へるが仲々さういかぬ。私共の坐禪には前に敵が居ないから仲々力が出しにくい私は空き寺を借りて、三年門を閉ぢて、坐禪をやつた事がある。當時私の事を瀧口入道だと友達が云つてゐたが、私は失戀して坐禪したのぢやない。御心配のない樣に願ひます。何しろこの顏ですからナ。失戀の資格が無い。

友達でも私の所へ行くのは凄くて恐いと云つてゐたさうです。何時でも赤ぢや鬚になつて、山男見た樣に、眼ばかりギョロ〳〵光らして引込んでゐたからです。私は三十五六の時分にはぢつと引込んで居つた。坐禪の修行は中々えらい。劍術の修行も痛い、柔術の修行も下手をすると

紋め殺されるんだから辛いが、それは相手が前に居つて呉れるし、見物も居て呉れるからいゝけれ共、坐禪は一人だから仲々本氣にならぬ。今晩一つ皆さんもやつて御覽。私は空寺で三年やつた。足が痛いやら、退窟やら、睡いやら、仲々えらいものです。やつて見ん事には分らん。

○

これは兵隊の野外要務令にもあることですが、戰鬪は百事多端なり、常に新しい事を、新しい氣持を蘇らさなければならぬ、古い事ではもう間に合はぬ。去年の要領でもう一遍やつて見い。さう云ふ譯にはいかぬ。それは芝居になつて了ふ。午前中の要領で午後やつたらそれは芝居なんだ。芝居ではいけない、芝居でない生き方をするがいゝ。そこには常に新しい、永遠の生命がある。常に新しくない所には永遠の生命はない。

俺があゝして、あの時にあゝやつたら勝つた。あゝ云ふ工合に彼處の所を摑んで、あゝしてかうしてと云ふ。そこに微妙な秘傳があるといふ、それもいゝが、然し秘傳といふものにしがみついたら秘術は出なくなる。秘傳といふものは、元來、先きを敎へるものでない。力を思ひ切り出した時の妙趣を味はすものだ。精限り根限り力を出すことをせず、彼の時あゝだつた、此の時かうだつた、師匠の型はこれだつた、誰それの型はあゝだつた等と、過去の事や他人の事を頭に思



ひ浮べていゝ氣になつて居たら、秘傳も何もあつたものではない。秘傳を受けたが爲めに駄目になつたといふ武道家がある。祿でなしだ。

或る柔道の先生が、弟子に有る限り上等な技を敎へて試合にやつた。さうしたら弟子は見事に負け居つたといふ話がある。そんなものだ。先生から習うた手を出さうといふ事許り考へて居る其の中に胴體を見失うて了ふ。籠手先許り考へて居るから駄目なんだ。或る柔道の先生は、精神的訓練、敵を恐れない膽力、一生懸命になる意氣、それ丈けを敎へた、思ふざま練り込んでやつた。籠手先の技などは敎へんとおいて、放り出してやつた。ところがそ奴が大勝を得たといふ。そこに人生の微妙があるし、武道の妙味があるのだ。昔の柔道家がいつた歌に

柔道は技を盡して其の技を忘れて後に勝ちもこそすれ

と云ふのがある。柔術をやるのに、どちらも一生懸命にやるならば、籠手先も知つて居た方が勝つに決つて居る。然し覺えた籠手先が氣になる中は駄目だ、技を忘れて一生懸命でやる奴が勝つのだ。

雲弘流の歌がある。

跡先のいらぬ所を思ふなよ

只中程の自由自在を。

死んだ子の年を數へる様な事をしてはいかぬ。去年勝つたとか、來年勝つとか、そんな事はいらぬ事だ。

佛法の修行も現在といふものに全力を注ぐ。貧乏人でも金持ちでも學問があつてもなくつてもいゝが、現在といふものに力を一杯入れるがいゝ。さうすれば未來といふものはそれが生み出す又それが過去といふものを飾る譯です。「俺は今こそ貧乏してゐるけれどもな、俺の生れた家は金持ちだつたんだ。」そんな阿呆な事をいつてゐる。「俺の家は華族さんだつたんだぜッ」てな事を云ふ。それが一体どうしたといふのか。愚痴な人間は過去に生きてゐる。昔の事いうて慰んで居る。禪坊主の方にもそれがある。「俺は若い時は大いに修行したもんぢや」といふ。「只今は？」と云ふと、「今は一服してゐる」といふ。修行と云ふものには一服はない。一服したら死んだと同じ事です。現在は現在の生命を確に掴んで居らねばならぬ。

若い者は又「糞ッ今に見て居れ、其中に成功したらやつてやるぞ」といふ。斯んな事を云うて一生暮らして了ふ。未來にねぢりつけて現在を空虛にして了ふ。

今日を空虛にして過去の事ばかり云つてゐるものは、過去の亡靈だ。未來々々と云つてゐる奴



は未來の幻だ。私共は何時でもピチ〳〵して、思切り充實して生きてゐねばならぬ。過去、現在未來を包容する強い自己を何時も持ちつゞけて居なければ駄目です。武道位そこの所を眞劍に工夫出來るものはないでせう。去年は勝つたんだから、今年は負けたが差引いて呉れ、なんか云つても優勝旗を呉れない。糞ッ、來年こそ勝つぞといふ。然し來年生きて居るかどうか分りはせん去年の事を云ふより來年の事を云ふ方がいゝか知らんが、何れにしても負け惜しみだ。今日が御留守になつてゐる。

負けたら、心持よく負けたらいゝじやないか、それを氣持惡く負けて恨んで、畜生ッと喧嘩腰になつて、癇を立てゝやつてゐる。何たる事だ。劍術でも柔術でも腹を立てたら負けなんだ。技で假りに勝ち得たにしても、人格で負けてゐる。人格で負けたら問題はない。人格がゼロで技や力で勝つのが嬉しいなら獅子や狼になるがいゝ。

平素から洋々として底の知れない人格を有つてゐるならば、技に負けても何の恥ぢではない。

そこが

跡先のいらぬ所を思ふなよ

只中程の自由自在を。

○

今の話ではないが、或る貧乏寺の和尚が駕籠に乗つて、隣村の檀下に葬式に出かけた。駕籠に乗つて出かけたはいゝが、古るぼけたボロ駕籠であつたんで、途中で底が抜けて了つた。そこで駕籠をかついでゐた人達は應急策として古縄を拾つて來て、和尚を中に入れたまゝ駕籠をがんじ搦めに縛り上げた。而して縛つた駕籠をかついで、よいしよ〳〵やつて村の入口についた。するとそこへ、丁度お寺參りをしてお説教を聞いて來た許りの爺さん婆さん等が通りかゝつた。「おや、可哀さうに、今御説教で聞いたばかり、無常の風は時を嫌はず、南無阿彌陀〳〵」とお念佛を唱へ出した。てつきり土左衛門と思つた譯だ。たとへ死人と間違はれても、事實自分は生きて居るのだから、和尚は只默つて自己に親んで拜まれて居ればよいのに「緣起でもない、俺は生きて居るぞ」と云はんばかりに駕籠の中で「エヘン」と大きな咳拂ひをした。爺さん婆さん等は驚いた「オヤ!!死人かと思うたら科人ぢやさうな」と云つた。すると中の和尚愈々ムカ〳〵して「馬鹿ー科人ぢやないぞー」と怒鳴つた。「おや、科人かと思うたら、可哀さうにこれは氣狂ぢやさうな」と云つたと云ふ話がある。

これはまあ、たわいもない話ですが、然しながら吾々大いに敎へられる所がある。人生にはこ



んな風の事が隨分澤出あるんです。

人が何と云はうが、何と思はうが、本當に自分を掴んで、本當の自分丈けは見失はない。そうして眞の自己に親しんで居る。かういふ人に成るよう我々は修練をせねばならぬ「如實知二自心一」武道の奥義もこゝにある。雲弘流の目錄を見ても、さう云ふ意味が一ぱい書いてある。「負ける事なし、勝つ事なし」とあるのもそれです。「是非を云はず、己れを全うして、外を願はず」とあるのもそれです。流義を異にする人は、雲弘流は技が幼稚で素人おどしだ等と批判する人もあるさうですが、それは技の末だけを見た話で、修養の立場から見て、實に痛快と思ふ。

お經の中に、唯獨自明了、余人所不見とある。自分で自分に明徹しなければいかぬ。自己といふ話なら現代人は得意である。何かにつけて自己を振りまはしたがる。然しその所謂自己はどうも本物の自己でない。他人が評價した自己であつたり、月給の多寡や地位の高下等で評價の出來る樣な自己だと考へてゐるものが多い。だから川柳子がからかつていふのぢや。

先生が月給順に並びけり

月給で價値が定まる樣な自己が何だ。顔でも洗つて來るがいゝ。

○

「一合取つても武士ぢや」といふ科白がある。之は面白い。この意氣である。此の意氣地のあるところ、そこに日本精神がある。これは日本精神について私の云はんとする所を、武士道に飜譯して云つたものです。「一合取つても武士ぢや」私はこれ位痛快な言葉はないと思ふ。大勲位菊花大綬章をぶら下げて居らなければならないことはない。勳一等功一級でなければならぬ事はない。正一位稲荷大明神でなければならぬ事はない。判人官でも四半人官でも構はない。何でも本當の自己を掴んでゐるならば立派な人間である。そこを我々の佛敎では、天上天下唯我獨尊といふ此の言葉は、お釋迦様が俺が一番偉いんぢやといふ自負心を表明されたものと思つたら、大間違ひ、そんなことぢやない。天上天下唯我獨尊、これは天地と一つになつた悟境である。天地と波長の合ふ人間になつて、山を見ても川を見ても、鳥とでも獸とでも、一つ氣持ちになれて、「鶴の長きを羨まず、鴨の短きを嘲らず」自分は自分の雙脚を延ばして濶歩する。これはお釋迦様丈けのものではない。吾々もその境地に居るのである。月給順に並んで、一圓でも多く取つて上に坐るやうなことばかり考へてゐるから、その境地から離れて了ふのである。禪では、月給順に列ばぬ自己の眞價を現はして行く。禪坊主は「前に釋迦なく、後に彌勒なし」と云ふ境地に生きて居る。



堅に三際を極め横に十方を盡す、三世も十方も一呑みにして、宇宙一杯の自己に親しむのです

○

細川侯が宮本武藏に「嚴の身」について問ふた事がある。武藏は一諾して、寺尾求馬介を御前に呼ばれん事を乞ふた。寺尾求馬介は細川侯のお小姓で、武藏の弟子で既に武道の奥義に達してゐた。呼ばれて求馬介は殿様の前に出てかしこまつた。やがて武藏は嚴かに「君命により切腹を仰付ける、直ちに用意を致せ」と云つた。求馬介は「ハハッ」と畏まり、靜に別室に下つて行つた。其の態度は神色自苦、少しの亂るゝ所もなかつた。之を見送つて武藏は「只今の求馬介の態度こそ正しく嚴の身で御座る」と云つた。求馬介は勿論非常な御褒めに與つたのである。

腹を切れと云はれても、取止めだッと云はれても、顏色一つ變へぬ、何が起つても、ビクともせぬ此の心の構、これであります。人間はこれでなくては人間ぢやない。これを唯我獨尊とも云ふのです。

死ぬのはかなはん。他の事なら大概の事はよいがと云ふ人がある。さう云ふ人は何一つ本當の事は出來ない人です。何をするにも生命がけでやらねば本當の事は出來ぬ。

戰爭は生命がけです。私も兵隊に行つた時は、生命がけの事をさせて貰ひました。仲間はわし

の事を、生命がけの天才だと云ひ居つた。戰爭は十二三遍しかしませんでしたが、斥候には何十遍も出かけました。部下を連れて行くと面倒だから一人で行くのが好きでした。眞暗がりの中を行き來するには、一人の方が工合がよいです。

戰爭の時の樣に生命がけで居れば、人生まことに苦はないですナ。

要するに人間は生命がけです。武道にしても勝負などに目をくれるものぢやない、勝負に目をくれず、生命がけで眞劍にするがいゝ。つまり人生は人格です。

これを何時もお互に忘れない樣に、腹の中によく据えて置くことが大事です。

二、三年前の夏の事ですが、早稻田の劍道選手が優勝した時の事です。勝つた早稻田は皆盡く端然として靜坐して居つたと云ふ。負けたのは何校だつたか忘れましたが、負けた方が今や將に泣き出さうとした時——したのかせんのか知らん、泣きの構へと云ふのは聞きません——兎に角勝つた早稻田方がジッと靜坐してゐるのに氣がついて、負けた方の連中が一人坐り、二人坐り、三人坐りして、負けたものも、勝つたものも、兩軍共に端然として靜坐したといふことを聞きました。私は之れを聞いて思ひました、世の中は自動車や飛行機が進んだ許りぢやない、武道も進んだと思ひました。勿論進まなければ申譯がない。飛行機や自動車に申譯がないです。飛行機が



飛んでる、只空に泡を吹いて見てゐるのでは柔道家も申譯がない。技量も技量だが、人間は人格的に奥へ奥へと進みたい。毛唐人から貰つたものばかりを進ませて置かないで、此方に芽生えしたものを確かり進ませねば申譯がない。科學者が顯微鏡を覗いたり、藥の實驗をしたり、マンモスの骨を掘り出したり、モルモットに注射して、苦心したりする程、我々は精神的に、つまり本來の自己に蘇がへらねばならぬ。此の日本の國を地の底からコンクリートで積み上げた樣な、立派なものにするには、我々は本來の自己に立ち歸り、正眞正銘の日本人にならねば駄目です。それには、武道の上の事で云ふならば、武道家は皆禪僧にならなければならぬ。勝つた早稻田が調子づかず負けた方も傲つて、端然と坐る、いゝですな。かういふ風で、眞實に、奥へ〳〵と進むのです。武道家が一子相傳とか何とかよく云ひますが、つまり本來の自己を練り上げる事を相傳するのです。相傳の內容は人格です。此の人格が幾つか卵を生んで一人子が百人も出來、千人も出來、日本國中盡く武道の極意皆傳の人にして貰ひ度いものです。

○

御經の中に、かう云ふ話があります。五武器といふ五つの武器を使ひ拔く達人が居つた。五つの武器といふのは鎗、弓、棒、それから刀、薙刀の樣なものだつたでせう。それはよく知りませ

んが、兎に角この五つの武器を使ふ武道の達人です。

この達人が諸國修行に廻つた。この修行は無畏といふ修行です。畏れの無い境地を本領としての修行です。さて達人五武器が或る日、山へ掛らうとした。峠を越えて他國へ行かうといふのです。すると麓の村の者が「若し〳〵お武士さん、此の山には恐ろしい化物が居ります、どんな者でも取つて食つて了ひます。此の山越えは危險だから、お止めなさい」と云つた。五武器は「何の、俺は畏れの無い修行をしてゐる者だ、一切のものを畏れないのだから、心配しないでくれ」というて、どん〳〵山へ登つて行つた。山へ深く入ると、果せるかな怪物が現はれた。何といふ怪物か、漆と膠と鳥もちと、而しておまけにエレキ仕掛か何か知らんが、何しろ粘着力の強い而も彈力性のある恐しい化物である。五武器は先づ以て矢をつがへて之を射た。ある限りの矢を使ひ果した。然し矢は怪物の体にペタリと貼り附いただけだ。

今度は鎗をしごいて向つて行つた。然し鎗も突き立たない。鎗も亦怪物にひつ附いて了つた。今度は薙刀で行つた、薙刀もひつ附いて了つた。刀もひつ附いて了つた。仕方がない。五武器は体あたりで行つた。体がひつ附いた。手で突いた、手がひつ附く。足でウーンと蹴つた。足がひつ附いて了うた。頭を打ち附けた、頭もひつ附いて了つた。五武器はまるで鳥もちにひつ附いた



蠅の様になつた。怪物は五武器が自由を失つたのを見屆けて、愈々食ふ算段を初めた。さて何處から食はうか。五武器をあつちこつち見まはす。すると五武器はまるで赤ちやんがお母さんに抱かれた様な優しい顏をしてヂッとしてゐる。怪物はそれを見て不思議に思つた、一體これはどうしたのだらう。

今食はれようといふのに、更に恐がる様子もなく、驚く様子もない。そこで怪物は五武器に向ひ、「コラ小童、貴様は一體何といふ奴だ。貴様の様に不思議な奴は見たことがない。大概な奴は、あん〳〵泣きほざいて、助けて呉れの、人殺しだの、騒ぎ立てるのに、貴様だけは何にも云はないでヂッとしてゐるのは、どう云ふ譯だ、變な野郎だぞ、貴様は」怪物に詰られて五武器は底力のある聲で答へた。

「おゝさうさ。貴様は俺を食はうと思つてゐるだらうが、一体貴様といふものが俺以外にあると思ふか。又俺といふものが貴様以外にあると思ふか。俺達の本体は宇宙一杯なんだ。此の宇宙一杯の生命に較ぶれば、此の肉体なんかほんの名刺見たいなものだ。

貴様は俺の中のものだ。逆に俺は貴様の中にあると云つてもいゝのだ。貴様の外に俺無し、俺の外に貴様なしだ。宇宙一杯だ。食ふの食はれるのとの騒ぐのは迷ひだ。其處の所をよく呑み込

んで貴様もいゝ加減に悟るがいゝ。それでも食ひたいならば勝手に食へ、さア何處からなと食へさあ食へ」と云つて五武器は平氣でゐる。怪物は五武器の云ふ事がよくは分らぬが、何だか氣味が惡くなり

「何、本体は宇宙一杯と云ふのか、俺の外に貴様はない、貴様の外に俺はない。變な事を云ふ奴だ。貴様見たいな野郎を食ふことは止めにした、勝手にせい」と云つて、五武器を突つ放し、武器を戻して了つた。五武器は「さうか、それなら俺は行くぞ」と云つて、武器を受け取り、悠々と山を越えたと云ふ事であります。

○

我々には死があるからまた生れて働けるのだ。楠木正成も死んで生きてゐる。大石良雄も死んで生きてゐる。吉田松陰も死んで生きてゐる。玆に負け勝ちの外に武士道がある。

山岡鐵舟は武道の奥義に

行く先に我家ありけり蝸牛

悟らぬも悟るも同じ迷ひなり、迷はぬ先を悟りとぞ云ふ。

とある。勝ちだ負けだ、悟りだ迷ひだ、そんな事が何か、迷はん以前、勝ち負け以前のものを



摑め、そこに本當の自己がある。洋々として限りのないものがある。底知れぬ人格がある。肚がある。

それに徹するのには、本當の所、坐禪をして貰ふより仕方がないのだ。要は實の如く本當の自分を知り、本當の自分を見失はない樣に、修練をするにあるのであります。

附　錄

# 道元禪師正法眼藏坐禪儀

正法眼藏坐禪儀

參禪は坐禪なり。坐禪は靜處よろし、坐蓐あつくしくべし、風煙をいらしむることなかれ、雨露をもらしむることなかれ、容身の地を護持すべし。かつて金剛のうへに坐し、盤石のうへに坐する蹤跡あり。かれらみな艸をあつくしきて坐せしなり。坐處あきらかなるべし、晝夜くらからざれ、冬暖夏凉をその術とせり。諸緣を放捨し萬事を休息すべし、善也不思量なり、惡也不思量なり。心意識にあらず、念想觀にあらず、作佛を圖することなかれ。坐臥を脫落すべし、飲食を節量すべし。光陰を護惜すべし、頭念をはらふがごとく坐禪をこのむべし。黃梅山の五祖ことなるいとなみなし、唯務坐禪のみなり。坐のとき、袈裟をかくべし、蒲團をしくべし。蒲團は全跏にしくにはあらず、跏趺のなかばよりはうしろにしくなり。しかあれば累足のしたは坐蓐にあたれり、背骨のしたは蒲團にてあるなり。これ佛佛祖祖の坐禪のとき坐する法なり。あるひは半跏趺坐し、あるひは結跏趺坐す。結跏趺坐は、みぎのあしをひだりのもものうへにおく、ひだりの



あしをみぎのもものうへにおく、あしのさきおのおのももとひとしくすべし、參差なることをえざれ。半跏趺坐は、ただひだりのあしをみぎのもものうへにおくのみなり。衣衫を寬繫して、齊整ならしむべし。右手を左足のうへにおく、左手を右手のうへにおく、ふたつのおほゆびさきあひささふ。兩手かくのごとくして身にちかづけておくなり、ふたつのおほゆびのさしあはせたるさきを、ほそに對しておくべし。正身端坐すべしひだりえそばだちみぎえかたぶき、まへにくぐまりうしろえあふぐことなかれ。かならず耳と肩と對し、鼻と臍と對すべし。舌はかみの腭にかくべし。息は鼻より通ずべし。脣齒あひつくべし。目は開すべし、不張不微なるべし。かくのごとく身心をととのへて欠氣一息あるべし。兀兀と坐定して、思量箇不思量底なり、不思量底如何思量これ非思量なり、これすなはち坐禪の法術なり。坐禪は習禪にはあらず、大安樂の法門なり不染汚の修證なり。

爾時寬元元年癸卯冬十一月在越州吉田縣吉峯精舍示衆

正法眼藏坐禪儀畢

終